第六十一回桐の花賞

清水佑太郎（千葉）

右に贈ることを決定した

令和六年五月

コスモス短歌会

清水佑太郎の作品について

清水さんがコスモスに入会したのは二〇一九年。コスモス会員である妻、椎名恵理さんをコスモス合同出版記念会の懇親会に迎えに行った折、「来月から入会ね」と選者の方々に酔った勢いで誘われ、入会したという。今まで短歌は一切作ったことがなかったというが、入会当初から良い歌を作り、ほどなくして「コクーン」へ参加。五年ほどでこの実力とは、素質と吸収力がすごいのだろう。

○源氏パイの裏にたっぷりチョコついたやつは俺には少し早いな

○療養のホテルを出る日の体調がこんなに悪くて出て良いの、おれ？

○風呂上りバスタオル巻き湯冷めさす春一番が吹いた休日

歌の特徴は何といっても口語の使い方の巧さとリズムの良さ。そして内容がウイットに富む。一首目は、自分の拙さや未熟さをチョコ付きの「源氏パイ」という具体で表現する。二首目の口語の畳みかけるようなリズムは体調不良時の妙な高揚感を印象付ける。三首目の「湯冷めさす」は、あえて普段は使わないような言い回しにしている。春一番に対するハイな気分を読み取ることができる。

職場詠も気負わず素直に詠まれている。

○夏休みの間だけ金髪にした生徒の前髪すこし輝く

○始業式を含んでたった三日だけ生徒は俺の言うことを聞く

○先生の四月の仕事の七割は三月中にやりたかったこと

○教員の夏休み過ぎ教員の秋のビールは労働の味

清水さんは中高一貫の私立女子校で英語を教えている。教員になって四年目だそうだ。一首目はとても繊細なところを詠む。学校が始まって、金髪を黒髪にしたのだろう。けれど陽が当たると金髪だったのがわかってしまう。かつて生徒であった者としての温かい眼差しを感じる。二首目、「三日だけ」という言葉がリアルだ。三首目も数詞が効いている。四首目、「労働の味」の苦さが伝わる。これらの歌は教員として働き始めてわかった実感だろう。

時代の流れとそれに向き合う自分を詠むことも忘れない。

○通信の手段があまたある今日に電報で伝えたいことがある

○前作はリブロで予約して買った村上春樹をキンドルで読む

詠む楽しさ、意欲が伝わってきて今後が楽しみだ。

《選考過程》

選者団に推薦を求め、高野・影山・桑原・狩野・小島ゆ・木畑・大松・田宮・津金・福士・藤野・風間・田中・橘・水上比・鈴木竹・原賀・水上芙・大野・松尾・鈴木千・小島な・小田部・斉藤の各氏から回答があった。

清水佑太郎40点、清水美里26点、岩舘澄江22点、中村恵19点、宮梓一10点、小田沙也加5点、青野恵子4点、冨永恵美子3点、松下誠一3点、高野哲司2点、日山七菜子2点、尾花照子1点、谷川恵1点

この数字をもとに二月十七日、編集部で検討し、得点の最も多い清水佑太郎の受賞が決定した。

作品抄

源氏パイの裏にたっぷりチョコついたやつは俺には少し早いな
夏休みの間だけ金髪にした生徒の前髪すこし輝く
元寿司屋のドッグカフェには元保護犬の権左衛門の大きなベッド
特売のティッシュとマスクをかごに入れポイントカードを探す妻見る
妻からは見えない買いものかごの隅アサヒスーパードライ差し込む
泥まみれワイルドだろとかそんなこと思ってるんだろうこの犬は
便秘する犬のお腹をさする夜「出ろ出ろ」呪(まじな)いかけるみたいに
「陽性です」医師の言葉の重力に診察室の空間歪む
療養のホテルを出る日の体調がこんなに悪くて出て良いの、おれ？
一冊と向き合う時間が長過ぎてあと千年は生きなきゃならない
すこしだけ稼げる大人になったから洋書にペンでガシガシ書き込む
東京博多、新幹線で三百円イヌの入ったキャリーケースよ
風呂上りバスタオル巻き湯冷めさす春一番が吹いた休日
旧仮名で作る短歌に憧れて『古文解釈はじめの一歩』
いつもとは違う種類の不在票よ妻宛の電報が来たらし
通信の手段があまたある今日に電報で伝えたいことがある
マスク着用自由化の日の朝の着用率は百パーセント

追試験の採点終わり担任に両手で大きな「〇」サイン出す
花粉症で本調子ではないのです本調子なのは七、八月です
ねぇ先生。よければ本棚いりません？ 栄転ですか？ 桜渦巻く
次、どこで英語を教えるんですか？ 桜の校庭見ながら話す
始業式を含んでたった三日だけ生徒は俺の言うことを聞く
膝の上に我が犬乗せて本を読み五分に一回ずつ目を合わす
日曜の午後はこころの螺子巻かず犬の時間にからだを溶かす
前作はリブロで予約して買った村上春樹をキンドルで読む
六年の月日の重さに耐えているランドセル縫う糸の太さよ
世の中が進むスピードはこれぐらいパスポート申請の二時間
パスポート受け取り口に置いてある『ゴルゴ13』読んで待ってる
わが犬を歩かせられない炎天のアスファルトに息絶えた蚯蚓よ
干からびた蚯蚓の脇を通り過ぎ人は三十六度を生きる

感想

昨年同賞を頂いた妻が、コスモス短歌会に再入会するか迷っている時、『徒然草』の「能をつかんとする人」を引用して無責任に背中を押しました。しかし私自身が短歌に興味があったわけでは決してありませんでした。その後三年間、うんうんと唸りながら歌を作っている妻をただ横目に見ていました。それから、おそらく彼女の夫というだけでお誘いを頂いてコスモスに入会し、見様見真似で短歌を作り始めたと思ったら、数年が経っていました。このような賞を頂けたことは想定外であり、望外であり、嬉しい誤算です。

略歴

一九八六年　鹿児島県生まれ
二〇一九年　コスモス短歌会入会

第六十一回　桐の花賞選考資料抜粋

本年度桐の花賞の選考のもととなった推薦文と作品の一部を、ここに掲載する。推薦作品抄は、推薦者の挙げた作品の中から編集部が適宜抄出したが、推薦の多い作品を初めのほうに掲載してある。

A・

1位　清水佑太郎
教師の生活を詠んだ作品が多いが倫理くさくなく、若々しく、考え方も発想も自由な感じがよい。

2位　清水　美里
日常の些細な事柄に詩を見い出し、生き生きとした形にして見せてくれる。生き物や人による心情のやさしさが魅力。

3位　岩舘　澄江
個性的把握の根底には風土によって育まれ培れてきた心情が反映されている。

B・

1位　清水佑太郎
教師という職場の歌と私生活の歌の割合が程よく、数字を使った歌、口語で表現した歌に魅力がある。

2位　岩舘　澄江
人間の身勝手さ、弱さを若者らしい視点で直視し、的確な表現で歌を詠む。現代を映し出す感覚が優れている。

3位　宮　梓一
新婚さんの青年の気持ちのいい歌群。作者の明るさ、優しさがきらきらしていて、読後がさわやか。

C・

1位　清水佑太郎
教師としての歌に、今の時代の生徒や学校の様子が捉えられ興味深い。生活の歌、犬の歌にも個性が感じられる。

2位　清水　美里
見えないものを、言語化して詩に昇華しようとする。何気ない日常も不思議な空間として立ち上がる。

3位　宮　梓一
新婚生活が微笑ましく、そこには現代も映し出されている。仕事や家庭生活の中から弛まず歌を掬い取って行って欲しい。

D・

1位　清水佑太郎
教師のそして若い夫婦の日常生活を率直に詠う。それぞれの素材が些事ながら明るい光を放つのは自他への信頼からくるも

推薦作品抄

清水　美里＊

切り込みを十字に入れてスプーンで掬う熟柿は私の内部
おやここは百足の家か物干しに靴下靴下無数に揺れて
ガラス窓に耳くっつけて目を閉じて朝日を浴びる草木となりて
君がしめた蓋はいつでも固すぎて君がいないとずっと開かない
蝶結びできない子供だったこと思う今年もサンタとなりて
長靴を履いているのは躊躇なく波打ち際を踏みしめるため
読点が多いメールを書く人のわかってほしさ　わかってあげる
同じチラシ二枚郵便受けにあり配れる人の指のかじかみ
もう二度と発光しない発光器山と積みあげホタルイカ喰う
運動会ではない日にも赤白の大玉がある校舎のどこか
産めるならもっと産んだねそうだねと一人っ子らの母なり我ら
イルカショー見向きもせぬ子どちらかといえばおそらくイルカに近く
幾重もの水着の跡を証とし海が私のものだった頃
野分して蝶の軌道を目でなぞるあなたに話せないことばかり
整列をさせられている混沌のようで無印良品苦手

のだろう。飼い犬の歌が印象深い。

2位　岩舘　澄江

心に痛みを抱えながらも自然を社会を広く受容しようとする健気な精神がにじむ。素材を歌として着地させる語に、自己や社会への冷静な視線を感じる。

3位　小田沙也加

大学を終えて院に進もうとする岐路に立つ作者の微妙な不安定感が、生活の中の具体を歌う中で、事実べったりではなくうまく言語化されている。　E・

1位　清水佑太郎

三十代後半の教師。全力で生きる姿が頼もしいが、今期コロナに罹患する。その病詠の連作の自在さが、作者本来の資質の豊かさを示している。

2位　岩舘　澄江

なめらかな韻律を生かしながら、人物や事物を視点豊かに詠う。何よりの美質は、作品の内容に見合った言葉のリズムを摑んでいることだろう。

3位　小田沙也加

現実の光景を踏まえつつ飛躍の志をもつ人だが、読者を説得する表現力を備えている。まだ二十代の作者。今後、更に実力を伸ばしてゆくだろう。　F・

1位　清水　美里

自分の感覚を大切にして、的確な言葉を与えて表現している。丁寧な物の見方が魅力で、読者を立ち止まらせる。今を懸命に生きる作者が見える。

2位　高野　哲司

一筋に植物を詠む。知識を並べるのではなく、生命に心を寄せて、友へのまなざしで野草を詠む。定型におさめる工夫が見られる。

3位　宮　梓一

実直な人柄が伝わる作品。会社員としての生活実感を、等身大の言葉を用いて詠む。素朴な相聞歌、明快なスポーツの歌もいい。　G・

1位　清水　美里

家族や身近にある素材から、自己の内面をみつめる思考へとおりてゆく過程が深い。自己のみならず他者の心へのやさしさも胸を打つ。

2位　宮　梓一

歌柄はあかるく、表現もおおらかでダイナミック。一方、歴史をみつめたり、新婚の歓びを詠む歌は繊細でやさしい。

3位　岩舘　澄江

口語を巧みにあやつり、意表を突く発想や表現が斬新である。読者を楽しませる歌が多い。　H・

1位　清水　美里

口語を多用した歯切れのいい調べ。素材がバラエティーに富んでいる。飾らず本音を出す歌柄で、日常詠が中心だが、展開に意外性があり、新鮮だ。

岩舘　澄江 ＊

たっぷりと休んだことで全身が感度１００パーセントたのしい
楽しみな気持ちと終わる悲しみが同時に迫る夕焼けの空
雑草に覆われながら黄と紅のダリアはとても下品に咲いた
エルメスでしか埋められない生活がこの世にあって別の世界だ
結婚にときめきはもう要らないと友はキリリとわたしを諭す
落ちていたツナを発見した蟻が油まみれで苦戦している
おたがいにわかりあえないパパママは犬をとおしてやりとりをする
マスクとる瞬間妙に照れますね一緒にお風呂入るみたいで
とろとろと寝湯につかってながめればいまだ新品みたいなおなか
自己中な欲が出てくる前にすぐ祈りにふたをする初詣
人間の都合によって口に輪をはめられた犬「わうわう」と鳴く
少しでも時がふくらむような気がしてゆっくりと歩いています
あっけなくくだる診断そうなのかそうだったのかこの半年は

中村　恵 ＊

欄干から車の裾から木の実から逆さの空をつららは映す
いやなところばかり見つける眼の奥に女郎蜘蛛いて網を揺らしいる
カツアゲをされそうなわれカツアゲをしそうな友につけまを習いき
浜田さん田中さん経て田淵さん田んぼがすこしずつ深くなる
いもうともわれもおかっぱだったころ好きだったもの母とグラタン
春が来て会わなくなった友のことすこし広げて小さく畳む
ぶつかってさばいてながす。吹雪の夜わたしに代わるフロントガラス
ピウ・フォルテと言うときおもう取手駅東改札、父の抱擁
声変わり前の子どもがその母を連れてゆくなり縁日の宵
すこし泣いて気が晴れたわれわが湿度受けて夫に来る低気圧

2位　清水佑太郎
教員としての職業詠がいい。人間のみならず、生物への眼差しに愛が感じられる。コロナ罹患の歌など、時事に即して詠むべき素材を詠んでいる。

3位　宮　梓一
結婚したばかりで、弾んだ印象の歌がある。食に関する歌をよく詠む。「35歳会社員」とのことだが、職業詠は少なく、外出先での嗅目詠に佳品があった。　I・

1位　清水　美里
生きていくことで負う痛みを詠んだ歌に惹かれた。見逃しがちなこと、繊細な部分を優しく、しかし鋭い視点で詠む

2位　清水佑太郎
口語での詠みぶりがリズム良く、内容に合っている。自分や社会を客観的に見て、ウイットに富む。

3位　宮　梓一
幸福感を良い歌にするのは難しいが、喜びを素直に詠んでいて気持ちが伝わってくる。口語や会話が活きている。　J・

1位　清水　美里
地力のある作者。独自の把握があり抒情のある作品は読む者の心に届く。己を見つめる陰翳深い作品や他者を詠んだ繊細で温かな眼差しの作品が心に残る。

2位　中村　恵
日常の一場面が詩情を伴って詠まれている。物に託して心情を詠むことに秀で歌に奥行きがある。リズムにも無理がなく短歌の詩型を味方にしている。

3位　岩舘　澄江
勢いのある文体が印象的。実感に裏打ちされた表現が新鮮で、意外性のある展開に引き込まれる。ダイナミックに見えて繊細な感性からの作品に惹かれた。　K・

1位　岩舘　澄江
自然の景を独自の感性で切り取り歌に取り込む。見つめるのは自分の暮らしばかりではない。社会で起きている問題を把握し見逃さない。

2位　清水　美里
ある現象の起こる原因理由を見抜きそれを素材として歌に昇華する力がある。抽象的な概念を具体例をもって歌に反映する冷静さがある。

3位　清水佑太郎
時の長さを物理的な太さでたとえる認識が面白い。色で譬えられる事象と色そのものとの関係を作品化する。オノマトペを生かす感性がある。　L・

1位　中村　恵
歌柄が変わりつつあるのか、以前と比べて、柔らかな言葉使いで自身の周辺の人々や日常を詠む歌が多くなってきた。そして、眼差しの優しさも良い。

2位　清水　美里
機知に富み、発見のある歌は、どれも新鮮で魅力的である。口

宮　梓一 ＊

得点に踊るアルプススタンドの奥は真夏の紺碧の空
「光あれ」引っ越してから三日後をインターネット工事日とする
大船渡に着くまで三時間くらい佐々木朗希のボールに乗れば
百万の帰らぬ人を見送った門司の港でカレーを食べる
ひとりでは使い切ることなかったなドレッシングをまた買いに行く
たんたらたんたったったーと口ずさみ油が光るバットを洗う
令和五年駅ビルのなか堂々と「現金支払いのみ」の張り紙

小田沙也加 ＊

手を繋ぐかもしれなくてこの人の爪の形を覚えたかった
固まった砂糖を崩す　暴力は誰にもちいさく備わっている
郵便は明後日届く　一週間前の空気を閉じ込めながら
名前さえ知らない画家の絵を買いたい　言葉でできた塔を建てたい
ひねってもひねっても水しか出ない赤の蛇口を殴る夕暮れ
電球を変えれば世界が明るくなる　四百円ですぐ明るくなる

冨永恵美子 ＊

黄金比の眉毛が描けた新年の仕事はじめの身支度よろし
中年期ふいに始まる傘の柄が折れてかなたへ飛んでいった日
あんかけのとろみのような眠気きて肩から夢へと沈んでいった
セーターの毛玉くらいのちょっとした嘘ふたつある雑談をした
読みすすむスピードやたらに遅い本つまりわたしに必要な本
産めないか産まないだったかゆっくりと忘れて君との時間を生きる

語の使用も、先行歌人に学びつつ、個性を感じさせるレベルに達している。

3位　清水佑太郎

日常の出来事を口語を使いこなして詠んでいる。おかしみを狙った歌も多くあるが、嫌みはなく、楽しめるのも、この作者ならではの持ち味であろう。　M・

1位　中村　恵

日常の細事を見逃さず詩へと昇華させる。さらけ出すように自己を詠み、ユーモアと自虐性がある。

2位　岩舘　澄江

歌材が豊富。微妙な心の襞を軽やかな口語に乗せた身体感覚が心地良い。

3位　尾花　照子

荒削りではあるが、表現の飛躍に思い切りがあり叙景歌の中に物語があり魅力的。　N・

1位　中村　恵

視点に独自性がある。禍福さまざまある日常を、短歌を読むことで詩に昇華している。内省的な眼差が効いた作品に惹かれる。

2位　清水佑太郎

教職にある人だろうか。伸びやかな歌柄で激務の日々を詠む。口語にリズムがあり、言葉に負荷をかけない詠風が新しい。

3位　岩舘　澄江

かすかにマイノリティとしての自覚が感受される作品に、現代の女性の生き辛さを感じた。その発露としての短歌があってもいいと思う。　O・

1位　松下　誠一

ドライな口語の軽やかさ、韻律操作の自在さ。主体を通じて現代社会のひとつの姿が見えるようです。

2位　日山七菜子

個人的な苦しみが、ときおり社会へ拓かれるまなざしに繋がる鋭さ。斬新な比喩にひとさじ含まれる痛みにも注目します。

3位　谷川　恵

作歌の基礎の力のある作者。伝統詩としての短歌の良さと、新しい表現へ手を伸ばすバランス感覚に惹かれます。　P・

1位　青野　恵子

自身の身体感覚と事象とのつながりの表現に優れている。比喩表現に長けていて、思いがけない比喩でありながら読者を納得させる力がある。

2位　小田沙也加

身近なことでありながら、誰も気づかなかった事象や状態を鮮やかな表現で提示する技に優れている。はっとして後大きくうなずく、そんな作品群である。

3位　清水佑太郎

衒いのない作品に好感がもてる。作者の思いを伝える具体が的確に選びとられていて、具体を通した心情の描写が印象的である。

青野　恵子 ＊

右耳の奥から寂しいと声がして雪虫ふわり枕辺に放つ
緑陰に水玉模様になるあなた会意文字のように寝ており
雨の日の不在に最も濃く君を思う私は小蛇のようです
ほとばしる百日紅の花　真昼から始まっている花火大会
僧坊がかつて並んだ参道の河に墨染めの僧がたたずむ

松下　誠一 ＊

遮断機のまぎわに立っていることは僕を読みとく情報じゃない
野良猫の尿のにおいの立ちのぼる茂みにフリスビーが迷い込む
十円の価値だけドライヤーをしてあとは夜風に任せればいい
二十年生きた地元じゃどう散歩しようと知った道にぶつかる
買い物をしてれば君に似合うものばかり目につく梅雨のヒカリエ

高野　哲司

校庭の牡丹桜の花弁には維管束といふラビリンス在り
あかねさすムラサキツユクサ描写して文様を描く和更紗職人
星ぼしに「夜の呼吸」を合はすごとフジバカマ咲く神野の里に
会下山（えげやま）のクロガネモチの思ひ出は牧野博士と出会ひし朝
ダンチクと六十年ぶりに再会す波音のする海沿ひの寺

日山七菜子 ＊

目の前にぽんと出てきたにんげんに手を引かれ乗るエレベーターに
みっちりと枝しなるほど小鳥たち脚や胸やらよく見える服
ワイシャツに包まれている胸みたい玉蜀黍の粒のすべてが